

One purpose

FOR BETTER COMMUNICATION

同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY

特集

同志社大学 新時代への胎動

●同志社人訪問

プロ野球 東京ヤクルトスワローズ内野手
宮本 慎也さんに聞く

『ONE PURPOSE』は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までご意見・情報をお寄せください。

※今号に登場する学生の学年は取材時によるものです。

	特集	同志社大学 新時代への胎動	2
特集Ⅰ	村田晃嗣 新学長に聞く 「一国の良心」を育てる大学へ		3
特集Ⅱ	「自ら学ぶ」学生の広場 日本最大級の「ラーニング・commons」		5
特集Ⅲ	真のグローバル人材を育てる教育		7
ゼミ探訪 学びの時間			9
	理工学部 松岡 敬・平山 朋子 機械要素・トライボロジー研究室		
同志社の研究は今			11
	高次神経機能障害研究センター 小林 聡 生命医科学部教授		
京都の大学による特別講座			13
	楽屋裏から見た「八重の桜」		
CAMPUS NEWS			15
	ISAスタディーツアーで本学学生スタッフが活躍！/国連グローバルコンパクト・PRMEのアジア会議にて2位入賞/ホームカミングデー2012開催/2012年度秋学期外国語honors認定書授与式/特定寄付奨学金募金協力者ご芳名/新任教員紹介/退職教員/本学教員執筆図書紹介		
留学生紹介			19
	ニコライ・ミュズさん (AKP同志社留学生センターに在学)		
同志社人訪問			20
	プロ野球 東京ヤクルトスワローズ内野手 宮本 慎也さんに聞く		
MY JOB, MY LIFE ～シリーズ 私と「仕事」～			23
	・内山 正信さん(2006年 経済学部卒業) ・落合 瑛里子さん(2006年 文学部英文学科卒業)		
ANNOUNCEMENT			25
MY PURPOSE			27
	創部102年の名門ラグビー部で初のラグーウーマン ～目指すのは2014年、フランス・ワールドカップの日本代表～ 堀内 春香さん (スポーツ健康科学部1年次生)		

表紙の情景 [同志社礼拝堂(チャペル)]



アメリカン・ボード(海外伝道団体)が日本に派遣した最初の宣教師であるD.C.グリーン(海外伝道団体)の設計により1886年に建てられた礼拝堂。現存する煉瓦建造のプロテスタント教会としては日本最古である。明治時代の優れた近代洋風建築が並ぶ今出川キャンパスの中でも、礼拝堂は同志社の歴史とキリスト教精神を象徴する建物であり、創立者新島襄は「同志社の精神」として位置付けた。1963年には国の重要文化財に指定されている。

2012年5月から22年ぶりに改修工事を行い、床を張替え、椅子やカーテンなどを新調した。今月から礼拝や講演会、卒業生の結婚式などに利用される。またキリスト教主義大学である本学の最も大切なひとときとしてキリスト教文化センターが提供しているプログラムの1つ、チャペル・アワーが、毎週金曜日のランチタイムに開催される。

同志社大学 新時代への胎動

2013年4月。

同志社大学の歴史において、

1つの重要な転換点として、永く

人々の記憶に留められることになるだろう。

今出川・京田辺両キャンパスの再編により、

27年間におよぶ教学体制は大きく変貌。

時代を先駆ける新たな学びの空間が誕生し、

グローバル化を拓く新プログラムもスタートする。

新時代に向けてダイナミックに動き始めた

同志社大学の舵を取るのには、村田晃嗣新学長だ。

熱い視線が注がれる、その胎動をここに。

特集Ⅰ

村田晃嗣 新学長に聞く

「一国の良心」を育てる大学へ

特集Ⅱ

「自ら学ぶ」学生の広場

日本最大級の「ラーニング・コモンズ」

特集Ⅲ

真のグローバル人材を育てる教育

村田晃嗣 新学長に聞く

「二国の良心」を育てる大学へ

キャンパス再編後の課題

2013年は、同志社大学にとって大きな転機となる年です。文系学部が今出川校地に統合移転し、京田辺校地は理工系と文理融合学部を中心としたキャンパスとして再出発します。学部教育がそれぞれの校地で完結する環境にあつて、総合大学としての長所を活かし、幅広い教養を身につけた「地の塩」「世の光」となる人物を養成していくために、私たちは多くの課題に取り組みなければなりません。

まず第一に、今出川に2万人の学生が集うことにより、周辺のコミュニティといかにして共存していくかという問題です。学生たちの生活環境を含めて、地元の方々に大学があることのメリットを感じていただけるような環境を築いていかなければなりません。逆に大幅に学生数が減る京田辺は、引き続き活力を持って高い水準の研究と教育を推進していく体制を整えることが大きな課題となります。今出川、京田辺それぞれが自己完結し、あたかも「同志社文科大学」と「同志社理科大学」の2つの大学が存在するかのようになってはいけません。例えば文理解融合の科目、複合領域科目をできるだけ



夢を紡げる

同志社に

村田晃嗣

け多く開設し、今出川と京田辺両校地で文系・理工系の科目を学べるようにする。あるいは、今出川、京田辺それぞれの校地に、一方のキャンパスでどのような教育研究が行われているのかを集約し、その

情報を配信する発信センターのようなものを設置する。また、若手の研究員を中心に、両校地の特色を持ち合わせた文理融合型の研究センターをいくつか立ち上げ、一定の期間で成果が出れば、さらに研

究を助成していくような仕組みを作る。こういったことを含め、今後、具体的に大衆学としてどのような施策を展開していくのか、皆さんの知恵、アイデアを幅広く集約していきたいと考えています。

新学長 村田晃嗣

1987年同志社大学法学部卒業。1995年神戸大学大学院法学研究科博士課程後期課程単位修得退学。フルブライト奨学生として米国ジョージ・ワシントン大学大学院博士課程(政治学)に学ぶ。博士(政治学)(神戸大学)。広島大学総合科学部専任講師、助教授を経て、2000年同志社大学法学部助教授。2005年より同教授。研究分野はアメリカ外交、安全保障政策論。『アメリカ外交 苦悩と希望』『レーガン—いかにして「アメリカの偶像」となったか』など著書多数。1996年読売論壇新人賞優秀賞、1999年アメリカ学会清水博賞、サントリー学芸賞、2000年吉田茂賞受賞。1987年より日本基督教団神戸教会所属。

「夢を紡げる大学」とは

大学も町も社会も、多様性がなければ活力を失います。「夢を紡げる大学」とはすなわち、多様性が存在し、許容され、奨励される大学ということです。夢は様々な可能性を包摂しています。その可能性を追い求めていくためには、多様性が前提になければならないのです。

多様性の要素として同志社大学が持っているもの、その1つは京都にあるということです。日本の大学生の約4割が首都圏で学び、政治・経済・情報が一局集中している東京に対し、千年の都といわれる古い歴史と、様々なベンチャー企業を生み出したイノベーションな側面を併せ持つ京都には、異なる時代のものが共存し得る多様性があります。

もう1つはキリスト教主義の大学であることです。日本人の中に占めるキリスト教徒の割合は明治維新から今日に至るまで1%で推移しており、日本のように仏教や神道を中心とした宗教空間の中ではキリスト教は少数派です。そういうマイノリティの観点から物事を考え、他の宗教とも共存できる、キリスト教を通じて多くのキリスト教圏や一神教の文化とつながっていけるという意味で、本学は宗教・文化的にも多様なのです。

さらに言えば、私学であるということによって、創立者の明確な建学の精神を皆が常に意識し、独自性を重んじているのです。

学生について言うならば、法人内諸学校で学んだ人たち、全国の指定校から推薦入学してきた人たち、私学の雄として憧れて入ってきてくれた人たち、あるいは国立大学への進学が夢破れて来た人たちなど、様々なバックグラウンドを持つ学生が学んでいます。それこそが同志社大学の魅力であり、重層性や多様性をつくり出しているのです。

国際化に必要なもの

留学生を受け入れ、送り出した人数、あるいは学生のTOEIC[®]、TOEFL[®]のスコアだけで大学の国際化を計るべきではありません。もちろんそれらも大事です。まず、学生が英語力を総合的にしっかり身につけなければなりません。多様な国際化という点ではアメリカだけが世界ではないし、英語だけが外国言語ではありませんが、現実の問題として英語が世界の公用語であることは間違いない。圧倒的多数の人たちが英語でコミュニケーションし、インターネットでは情報の9割が英語という現代において、大前提として英語の運用能力がなければ、グローバルなステージに参入することはできないのです。実際に日本国内で働くのか、海外で働くのかは重要ではありません。グローバルなステージで考えるようになると、それまで自分を縛ってきたものがいかに小さなことだったかに

気づきます。

また他方で、過去、日本の英語教育には使える英語が身につかないという問題がありました。その批判への反動からツールとしての英語が重視され、背景にある文化、歴史、社会が切り離されてしまった。どんな言語もそれが運用されている社会や文化についての深い洞察がなければ本当には運用できません。発音の上手下手を超えた洞察力が必要なのです。したがって同志社大学は、異なる文化、宗教、価値観に対する深い洞察力を育めるような大学でなければなりません。それは新島襄が日本の近代化に際し、西洋の文物だけではなくその根底にあるキリスト教を理解しなければならぬという思いで同志社を創立した発想と通底しています。

キリスト教主義の大学として

同志社大学はキリスト教主義を教育理念の1つとしていますが、決して教職員や学生にキリスト教の信仰を強いるものではありません。しかし、キリスト教、あるいは宗教という観点から社会を見る目は育んでほしい。グローバルな社会では、宗教を抜きにしてビジネスはできなくなっています。この21世紀の多様な社会を生きていく上で、宗教はあらゆる物事を考える窓口、視点になるのです。社会、文化、自然科学、生命と倫理、

様々な分野で宗教的な側面、観点から考えなくてはいけない。そういう考え方ができるという点は同志社大学の卒業生の強みです。そのことが自分たちの社会人としての活動にプラスになるということを自覚して学んでいただきたい。

そしてまた、自分と違う価値観や立場の人たちに対して豊かな感受性を持ち、最終的に自分で判断できる人間になってほしい。新島襄が「同志社大学設立の旨意」に記した「一国の良心」。——その意味は、異なる意見を認めて自分の責任と判断で行動することであり、そういう人物を養成できる同志社大学でありたいと、私は思います。



日本最大級のラーニング・コモモンズ

1



アカデミックサポートエリア

3F

2F



プレゼンテーションコート
(プレゼンテーション・シンポジウム会場)

2013年4月、いよいよ今出川キャンパスの「ラーニング・コモモンズ」の運用が始まる。「ラーニング・コモモンズ」が位置するのは、「良心館」のルーセントプラザ吹き抜けに面する2・3階。両フロアを合わせた総面積は約2550㎡の開放的な空間だ。従来の「学習は教室の中のみ」という発想を超えて、授業の前に立ち寄り、授業が終わればまたその場所に戻ることが当たり前になるような設備と環境を提供する。

「相互刺激性」のある コミュニケーション空間

「ラーニング・コモモンズ」の発想は、1990年代から米国で採用されるようになり、事前の課題作業やレポート作成、プレゼンテーション準備の支援など、学生の学習をサポートする空間として多くの大学図書館に設けられてきた。その後、この施設の教育効果が評価されるに伴い、日本の大学でも図書館に学習支援施設の発想が取り入れられ始めた。

同志社大学版「ラーニング・コモモンズ」は、従来型のように図書館の一面を利用する形ではなく、独立した巨大空間。その一番の特徴は「視認性」の高さにある。主な用途によってエリアは分かれているが、すべてが見通せる開放的なレイアウトだ。これにより、お互いに何を学習しているのか、どのような学習の仕方をしているのかがわかる。「相互刺激性」のある空間となっている。机や椅子は可動式で、自分の発想で適したスペースを自ら作っていくこともできる。この空間レイアウトは、学生が互いに触発し合うための仕掛けであり、学習コミュニケーションを醸成していくための工夫である。「ラーニング・コモモンズ」の専属インストラ

クターは3名。さらには「ラーニング・アシスタント」として、大学院生らが学生の勉学の支援をしていく。ブレインストーミング法（集団発想法）、コンセプトマップの書き方、情報探索の方法、著作権の知識など、基本的な学習スキルを授業外の実践の蓄積で身につけるサポート体制を整えた。

「ラーニング・コモモンズ」のもうひとつの側面は、「コミュニケーションの場」であるということ。チームで協力して何かをつくり上げたり、海外からの留学生と日本人学生との交流の場としても活用。こうした学びを通じた国際交流から、留学生の多い本学ならではの学習コミュニケーションが築かれていくものと期待される。

「交流と相互啓発の場」と 「アカデミックスキルの 育成の場」

フロア構成を見てみよう。まず、2階の「クリエイティブ・コモモンズ」は、交流と相互啓発の空間。プレゼンテーションやシンポジウムの空間として使えるプレゼンテーションコート①、カジュアルなグループ学習ができるインフォダイナー②、グループワークエリア③などで構成され、いわば知識や学習成果をアウトプットする場だ。ま

た、海外留学を目指す学生のために、留学コーディネーターによる情報提供コーナー④をはじめ、実際に留学生と交流し、実践的な会話を培うグローバルビレッジ⑤も用意されている。

これに対して3階の「リサーチ・コモンズ」は、アカデミックスキルの育成空間として、知識をインプットする場。リサーチやプレゼンテーション準備に利用しやすい空間となっている。レポート作成などの学習支援を行うアカデミックサポートエリア①

のほか、グループスタディルーム②、マルチメディアラウンジ③などで構成され、可動式の椅子やテーブルを並べ、スクリーンやパーテーションを自由に使い、様々な空間をつくり出すことによって、多様なグループ学習の形態を組むことが可能。また、基本的なアカデミックスキルの講習会などに利用できるワークシヨップルーム④⑤や、

プリントアウトや最新の印刷メディアを提供するプリントステーション⑥なども設置。種々のサービスを提供している。

両フロアともに、主体的な学習を支えるインフラも整備。壁面にはホワイトボードやスクリーン、60インチ相当の電子黒板が設置され、インタラクティブなプレゼンテーションが行える。米国の大学では、すでに映像や動画を使つてのプレゼンテーションが一般的であり、また、レポートも「デジタルストーリーテリング」という10分ほどに編集した映像を提出するケースも出てきている。ここでは、壁面に映し出してプレゼンテーションの練習をしたり、映像製作のノウハウを身につけることができるのだ。

さらに、ラーニング・コモンズ全域で無線LAN接続(Wi-Fi)対応。貸出用ノートPC約80台を用意しているほか、持ち込みPCの利用にも対応している。

**学生自らが広げる
学習の可能性**

この空間で起こることは、すべて学生たちが主体。たとえば、2階のプレゼンテーションコート①は、企画に合わせてセッ

ティングが自由自在なので、ステージやマルチスクリーン、シートセッティングもアイデア次第。気軽なトークセッションから、パネルを展示してのポスターセッション、プレゼンテーションやイベントまで行えるほか、分割で使用すればワークシヨップなども開催できる。その近くのグローバルビレッジ⑤でトークセッションをしているグループの学生たちが、プレゼンテーションコートで行われているのを見て、その手法を学んだり、自分たちの学習に取り入れたり、学部や専攻を超えた交流の場となる。

つまり、現実版のSNSのような空間と言えるラーニング・コモンズ。SNSではネット上で行われる交流を、ここでは、学生たちが顔を合わせながら進めていくことができる。それぞれの思考過程を視覚化し、それを共有して学ぶことの学習効果は無限大。ラーニング・コモンズは、時間をかけて学生とともに成長させていく創造型・発展型の施設なのである。



②
インフォダイナー
(カジュアルなグループ学習)



③
グループワークエリア

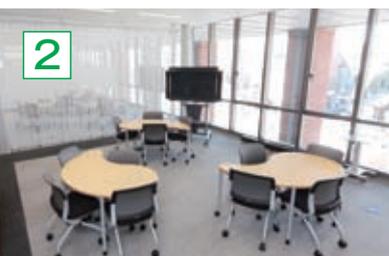


④



⑤

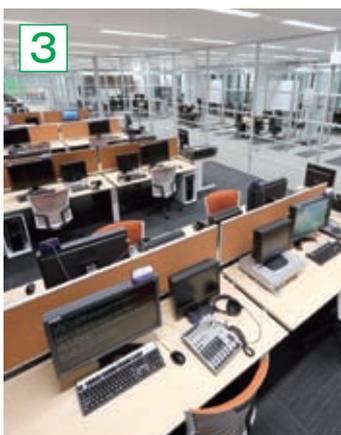
グローバルビレッジ
(国際交流)



②

**グループスタディ
ルーム**

少人数の打ち合わせから大人数のプレゼンテーションまで。様々な学習空間を学生自身が作れる。



③

マルチメディアラウンジ



ワークショップルーム

④

グローバル人材育成推進事業

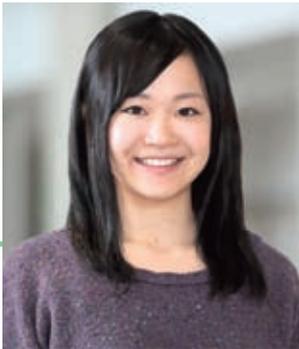
「考動する」グローバル人材を育成するプログラム・環境の提供

2012年9月、本学は文部科学省が公募した、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成を主目的とする「グローバル人材育成推進事業(グローバル30プラス)」に、その教育プログラムが高く評価され採択を受けた。この事業は、留学生の受入を主目的とする「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業(グローバル30)」と対をなすもので、全学推進型で採択された大学の中で、両事業とも採択されたのは、全国で3大学のみ。なお、グローバル30の中間評価で、最高評価「S」評価を獲得したのは本学だけである。

グローバル30プラスは、約6000名の入学者全員を対象とし、4年間の在学期間中に、学生1人ひとりがグローバル人材として成長するチャンスを提供するもの。そのための支援を全学体制で行う。全学部を通して、「留学型」と「国内型」の2つの教育プログラムを設定。全入学生が、グローバル人材となるための目標を設定し、その進捗状況を確認するための「Go Global」ポートフォリオ」を利用し、一定の基準を満たした成績優秀者には、「Doshisha “Go Global” Passport」が授与される。4年間で「留学型」1800名、「国内型」1200名を目標にグローバル人材の育成に取り組むプログラム・環境を整えている。

国内型

国内にいながらグローバルな人材となり得るカリキュラムを履修する「国内型」教育プログラム。TOEFL・iBT 79点相当以上の語学力習得や、英語のみで授業が行われる「国際教育インスティテュート(ILA)」での科目履修、留学生との交流プログラムなど、実践的な能力修得のための教育環境を提供する。



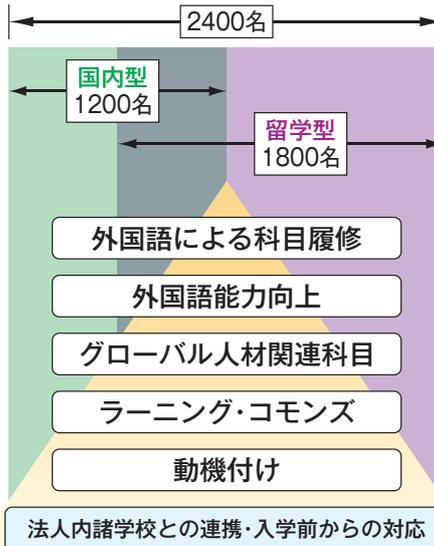
細見 果歩さん
【政策学部2年次生】

ILA科目は幅広い分野がバランスよく設置されていて、私は一週間に4科目を履修しています。1クラスが30人までの少人数制で、先生のレクチャーだけでなく、ディスカッションやディベートが中心。すべての講義が英語で進められるので緊張感がありますが、実践的・継続的な学びの中で、国内にいながらも外国語の運用能力が格段に向上するのを実感できます。また、留学生の友人との日常会話でコミュニケーション能力が大きく伸びますし、授業に臨む真面目な姿からは、大きな刺激を受けています。私は国際関係学に興味があり、将来はビジネスツールとして英語を使う仕事に就きたいと考えています。日々の学びによって、将来の目標へと確実に近づける、とても魅力的なカリキュラムだと思います。

'Go Global' Passport

'Go Global' ポートフォリオによる初期目標の設定、進捗状況の確認

良心を手腕に運用する「考動する」グローバル人材



留学型

実際の留学経験を通じてグローバルに通用する能力を身につける「留学型」。留学前・中・後それぞれへの、学習面・生活面両面からの支援体制の充実を中心とした本学独自の実践的な育成プログラムが準備されている。短期・中期留学、派遣留学、学部専門型留学と希望する期間や内容に応じて、様々なプログラムの選択が可能。



六田 拓洋さん
【経済学部3年次生】

2年次の秋から9カ月間、カリフォルニア大学デービス校に留学しました。カリフォルニア大学は世界の経済界へ多くの卒業生を輩出している大学で、他国からの留学生も多く、少人数の対話型の授業では、答えを求めて自ら能動的に学ぶ姿勢が身につきました。また日本語の授業ではTAをしたり、オフィサーで日本語を学ぶ学生の質問に答えたりするなど、サポートする側も経験。母国である日本の言葉や文化の面白さ、難しさを再認識する良い機会となりました。私にとってグローバル人とは、どんな人が相手でも、どんな環境におかれても、地道に努力し完成までもっていくことができる人。そのための行動力や柔軟性を留学経験から得ることができたと思います。

松岡敬 [理工学部教授]

「人間のための 科学技術」を自主的に、 責任を持って研究する

理工学部 機械システム工学科 エネルギー機械工学科
機械要素・トライボロジー研究室(松岡・平山研究室)

4年次生の半数以上が
大学院へ

2008年4月、60年におよぶ長い歴史を持つ本学の工学部は、理学の領域を取り入れた工学教育を推進する理工学部へと生まれ変わった。6学系情報、電気機械、化学、環境(数理)10学科編成の中で、機械系は電気、化学とともに1949年の工学部発足以来の伝統を有している。

平山朋子 [理工学部准教授]



機械系学科には、機械システム工学科とエネルギー機械工学科があり、両学科が連携を取りながら自由な科目履修を可能にしている。機械系学科の学生によって構成される研究室は現在13。その1つである機械要素トライボロジー研究室を担当するのは、機械システム工学科に所属する松岡敬教授とエネルギー機械工学科に籍を置く平山朋子准教授だ。

トライボロジーとは、摩擦・摩耗・潤滑を

意味する用語である。機械には必ず部品が擦れ合う、しゅう動部と呼ばれる部分があり、その摩擦を減らすことはエネルギーロスの低減に繋がる。摩擦に強い材料の開発や摩擦係数を減らす表面加工など、しゅう動特性の向上を研究するのがトライボロジーという学問だ。

研究室は学部の4年次生と理工学研究科博士課程(前期課程)1・2年次生で構成。研究室に入った4年次生は、大学院生とペアを組み、大学院生が取り組むテーマの研究・開発補助をしながら、先端設備の使い方などを学んでいく。そのまともとして卒業論文を書き、卒業して社会に出ていく者と、大学院へ進学し、さらに高度な機械工学の知識を習得するために研究・開発に励む者とに分かれる。

大学院に進む学生の割合は平均すると5〜6割。2013年度は4年次生15人のうち9人が大学院生として研究を続けるという。大学院では、より深い学識と高度な専門知識を得るためにそれまでの研究テーマを見直し、2年かけて主体的に取り組むテーマを決定。2年次の終わりに集大成の修士論文を提出、最終試験に合格すれば学位が得られる。

平山准教授が授業の進め方を説明する。「学生は研究活動を毎日自主的にを行い、いわゆる勉強会のような形式のゼミを週に1回行います。勉強会にはテーマごとにメンバーが集まり、発表者の研究内容について、

全員でディスカッションをします。研究室のメンバー全員が集まるのは、中間発表会と修士論文の発表練習会など年に2、3回。全員が集まる授業には松岡教授も私も出席しますが、それ以外は個別に対応する形で学生をサポートしています」

研究室は1つの
ファミリィ

ゼミにおける学びについて、松岡教授が語る。

「研究活動には、私たちがテーマを示して進めていくパターンと、学生自身が自主的にテーマを決めて行うパターンの2種類があります。基本は自主的に研究を進めていきますが、与えられたテーマであれ、自分で決めたテーマであれ、自らが責任を持って進めていく、最終的な目標に向かっていく、その過程で様々なことを学んでいきます。修士論文を書くという結果だけではなく、そこにたどり着くまでに多くの苦労をして学ぶことが重要です。その苦しい経験こそが、社会に出たときに最も役に立つのです」

学部の4年次で研究室に入ってきた学生も、1年が過ぎる頃には考え方が大きく変わってくるという。



「4年次生は研究室で先輩学生の指示を受けて動いていくのですが、その経験の積み重ねによって研究とはどういうものかが

わかるようになり、やがて研究が面白いと感じるようになります。そして4年次生の終わり頃には、自分でやっていく姿勢が自然に生まれてくるのです」

「研究室は1つのファミリー」というのが、松岡教授の考え方だ。

「大きな可能性を秘めた学生たちが同じ学問を通じて集まっている。研究の分野は違っても、学ぶことへの熱い気持ちは共通していて、それは社会へ出て変わらぬに繋がりを保ち続けます。先輩・後輩という上下の繋がりも深く、研究室で生まれた友人関係は、一生続くことが多い。われわれのゼミで過ごす中で、一人でも多くの仲間と良い経験を育んでもらえたらうれしいですね」

3年間で得たもの 大きさ

研究室のメンバーは全員で39人。この日集まってくれた9人は、研究科の2年次生。全員が就職先を決め、4月には社会人としての第一歩を歩み出している彼らに、研究室での3年間で得たことを聞いた。

田中悠輔さんは「トライボロジーは機械工学の中でもマイナーな学問ですが、だからこそその発見があります。研究を通してマインリテイの立場から物事を見ることができるようになりました」。池田光孝さんも「研究室でトライボロジーという学問を初めて学び、そこから物事を多角的に見る力を養い、その大切さを学びました」と言



う。「違うフィールドで挑戦するなど、広い視点で考える姿勢が身につきました」と、中嶋将人さんも物事に対する視点が変わったことを挙げた。

山口義文さんは「いろいろな分野のことを知りたいという知的好奇心が生まれてきました。今は興味がないことでも、社会人になってからまた勉強したい気持ちにならなるとは思いません」。川口嵩夫さんは「研究では何十回か失敗して初めて1つ成功する。失敗から学んでいくことが多いと実感しました」。櫻谷純宏さんは「未知の分野のことを自分で目的を定めて進めていくうちに、まったく知らない分野についてどうやって知見を深めればいいのか、そのアプローチの仕方を学びました」と、3人が

語ったのは学びの姿勢の向上だ。

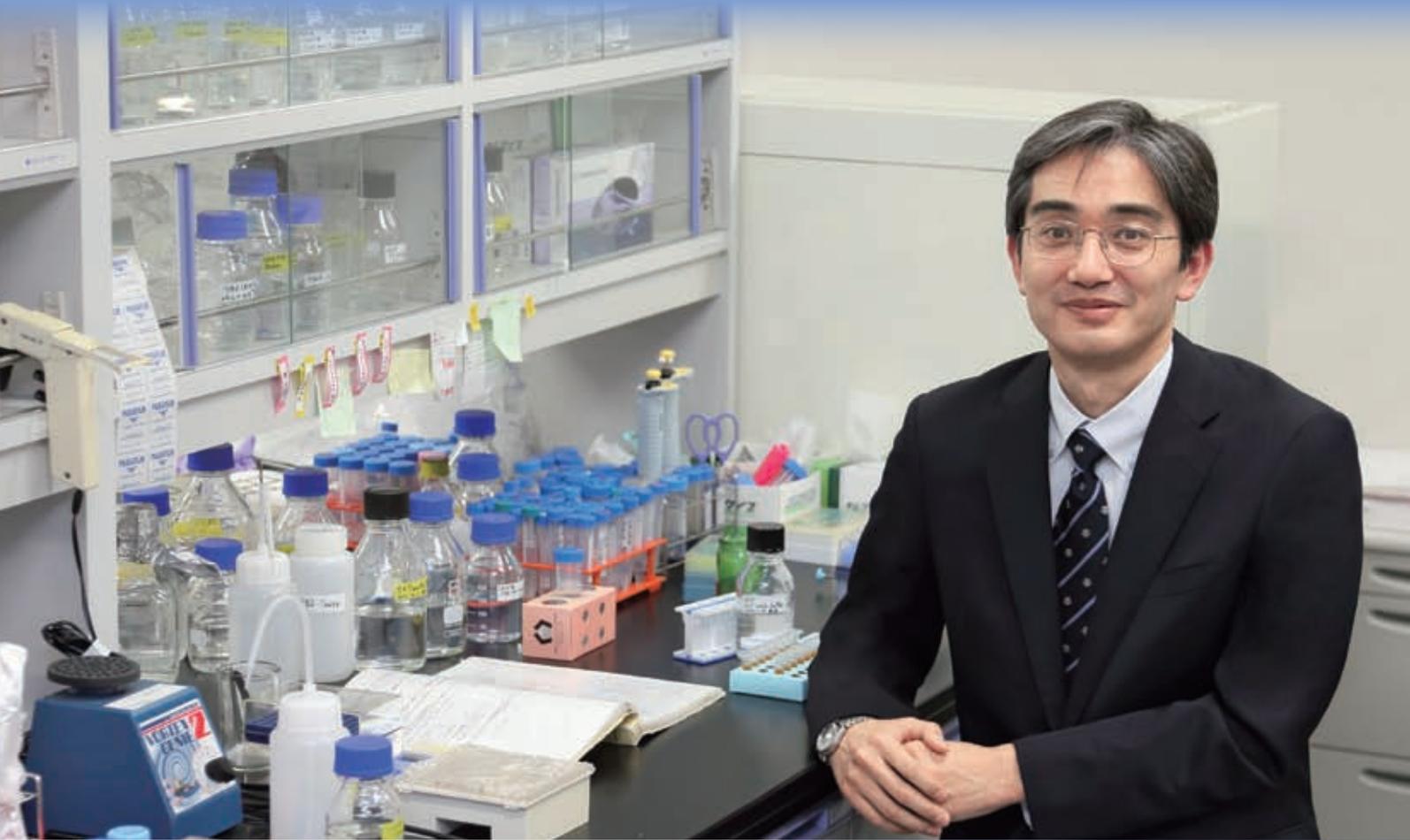
揃って「人間的成長」を挙げたのが江口友梨さんと前田成志さん。「研究室に入って先生と触れ合う中で、人間的に成長できたかなと思います」。江口さん「この研究室はとてもアットホームで、横と縦の繋がりが強く、みんなですんでいこうという雰囲気があり、人として成長できた気がします」(前田さん)

また、辻村修平さんは「実験装置の設計にあたっては外部の業者さんと話をすることもあり、人との関わり方を学べたことが大きいです」と話し、後に続いていく後輩には「研究というものは推論通りにいくことは少ないので、忍耐強く取り組んでほしい」とアドバイス。

「辛いこともたくさんあるけれど、せっかくの経験なのだからポジティブに」(田中さん)、「あきらめないで、自分なりにできる方法を考えることが大事」(櫻谷さん)、「周りの人から、自分がないものを吸収して」(川口さん)、「まず研究テーマを好きになること。そして自分で行動する自主性」(山口さん)と、それぞれが送ってくれた後輩へのエールを噛みしめた。



超高齢社会の重要課題解決に取り組む ライフサイエンスの研究拠点



高次神経機能障害研究センター

あきら
小林 聡 [生命医科学部教授]

2012年5月、生命医科学部医生命システム学科が中心となって構想した研究プロジェクト「高次神経機能障害の発症メカニズムの解明と新規治療法の開発」が、文部科学省の「平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択された。5年間(2012年～2016年度)にわたり、この研究プロジェクトを推進していくのが、新たにスタートした「高次神経機能障害研究センター」である。超高齢社会に突入しているわが国においては、アルツハイマー病やパーキンソン病などの患者の増加が大きな問題となっている。それら高次神経機能障害の発症機構を解明し、その知見をもとに新規治療法の開発に挑むセンターの活動と役割などについて、センター長の小林聡生命医科学部教授に聞いた。

生命医科学部の 研究力を結集

日本は世界で最も早く超高齢社会に突入し、急速に高齢者が増えています。それに伴って、アルツハイマー病やパーキンソン病といった高次神経機能障害の患者も増加しており、その治療法の確立が、現在の日本の重要な課題となっています。実は、私の母も20年前にアルツハイマー病を発症し、10年前に亡くなりました。幸い父が開業医だったので様々な対処ができましたが、一般の家庭では家族の負担は並大抵ではありません。介護によって家庭が崩壊するケースさえあります。新規の治療法を開発できれば、患者本人はもちろん家族の負担を減らすこともできますし、巨額にのぼる医療費を削減することにもつながります。その意味で高次神経機能障害、すなわち私たちが取り組む「脳」に関する活動の異常を示す病気の研究は大変重要なのです。

同志社大学に生命医科学部が開設されて5年。研究活動はこれまで個々の研究室によるものがメインでしたが、そうした幅広い研究力を結集させて1つの大きな研究プロジェクトに取り組む新たなライフサイエンスの研究拠点として形成したのが、この研究センターです。研究目的はその名の通り、認知症の60%以上を占め、国内に100～120万人の患者がいるとき



れているアルツハイマー病や1000人に1人の有病率と言われるパーキンソン病に代表される高次神経機能障害の発症メカニズムを解明し、その知見に基づいて新たな治療法を開発することにあります。

3チームが連携して 研究を推進

センターでは、生命医科学部医生命システム学科、2012年4月に設置された大学院脳科学研究科、その他学外の教員が集まり、研究テーマによって3つのチームに分かれ、各チームが連携しながら、高次神経機能障害の克服という目標に向かって研究を進めています。

3つのうちまず1つが、「ヒト検体と疾患モデルマウスを用いた病態解析」を行うチームです。アルツハイマー病研究の第一人者である医生命システム学科の井原康夫教授をメンバーとし、国内外の臨床施設でインフォームド・コンセントを得たヒト検体の提供を受けて研究を行っております。こうしたヒト検体で研究できることが、当センターの特筆すべき特徴の1つ

でもあります。ただ、アルツハイマー病やパーキンソン病の原因を細かく解析するには、亡くなった患者の細胞だけでは限界があります。そこで、神経の細胞が正常に動くために重要な、ある特定の遺伝子を壊したハツカネズミ、ノックアウトマウスというのですが、モデル動物を作製して解析していきます。このマウスの専門家が脳科学研究科の元山純教授で、ヒトの検体ではできない詳細な実験をマウスで行うことができるというのが、センターの特徴の2つ目でもあります。

そして、ヒトやマウスといった生物のレベルから視点をさらに小さくして、細胞レベルの研究をしているのが、「神経細胞の酸化ストレスによる機能障害と細胞死メカニズムの解明」をテーマに据えたチームです。鉄が錆びると同じように、私たちの体の中のいろいろな物質や細胞も劣化してしまいます。これを酸化ストレスというのですが、それがなぜ起こるのか、あるいは酸化ストレスが細胞を死に至らしめる分子の仕組みなどを研究しています。

さらに、「神経細胞内の恒常性維持メカニズムの解明と創薬への展開」をテーマとしているのが、私の所属する3つ目のチーム。メンバーの医生命システム学科の西川喜代孝教授は、ペプチドという短いたんぱく質を利用して、例えばO157のような疾病に対して体を守る薬を開発しています。その西川先生の創薬技術を使って研究

を進められることが、センターの特徴の3つ目で、このチームが当センターの中でも最も基礎的な研究を行っていると言っているかもしれません。

治療法開発までの 長き道のり

私たちの研究成果は論文発表か特許の取得というかたちで社会還元しますが、このセンターの研究は結果が出るまでに相当な時間がかかることが予想されます。5年という研究期間は、ライフサイエンス系の研究としては長くはありません。ひとまず3年目の中間レベルで、個々のチームが論文発表できるような新しい知見をまとめ上げるといふことを目標に置いています。

最終的な目標は新規の治療法、治療薬の開発ですが、そこにたどり着くまでに、分子、細胞、生物それぞれの研究の中で、アルツハイマー病やパーキンソン病に対してこの部位が重

要かもしれないという知見が得られれば、それを指標にして薬のスクリーニングや診断が可能になります。目に見えて発症し

てからではなく、まだ健常な段階で診断して神経細胞が壊れかかっていることがわかれば、その患者さんに薬を投与することで発症を水際で食い止めることができます。それが最終目標への大きな一歩になるでしょう。

重要課題である高次神経機能障害の克服に向かってアプローチしていく上で、医生命システム学科や脳科学研究科の脳と神経の専門家が集まり、それぞれ異なる得意分野で力を発揮し、互いに補完し合う。チームで研究を進めて行くセンターが同志社大学で立ち上がったということは大きな意義があります。また、生命科学部の優秀な学生たちが育ってきて研究に参画しており、マンパワーの充実という意味でも利点は小さくありません。すでに、各チームから興味深い成果が出つつあり、今年は公開シンポジウムを開いて研究交流を促進し、大きな目標に向かって着実に歩みを進めて行きたいと思っております。



楽屋裏から見た「八重の桜」

2月15〜17日に、京都の11大学による京都ならではの“知”を深める多彩な講座が、東京都港区の京都造形芸術大学・東北芸術工科大学外苑キャンパスで開かれた。同志社大学からは17日、「楽屋裏から見た『八重の桜』」と題して、本井康博神学部教授が特別講座を行った。

本井康博【神学部教授】



※職名は取材時のものです。

である福島県の会津若松でさえ知る人は多くありませんでした。旧姓の山本八重子なら少しは知られている、それが実状でした。

大河ドラマは経済効果が30億円とも50億円とも言われています。ですから各地から「この人を主人公に」という要請、いわゆる売り込みが激しいのです。八重の故郷、会津若松でも実は数年前から別の人物を推していました。会津藩の初代藩主・保科正之です。地元では県民挙げてこの人物の売り込みに取り組んでいました。そんな時に八重が2013年のヒロインに抜擢された。会津は大喜びですが、その度合いは95%。もし保科正之に決まっていたら120%の喜びだったでしょう。マイナス5%は、自分たちにもよくわからない女性に決まった意外感とがっかり感です。

**地元・会津も驚いた
2013年大河ドラマ
の主演決定**

2013年の大河ドラマの主演として新島八重が発表された時、国民の反応には厳しいものがありました。教科書はもちろん、百科事典にも載っていないほとんど無名の人物だったからです。そもそも八重の生誕地

NHKは一体なぜ、そんな無名の女性を大河ドラマのヒロインに選んだのでしょうか。それには2011年3月11日の東日本大震災が大きく関係しています。その年、3月の時点で大河ドラマの主演はほぼ絞り込まれていたはず。ところが、NHKは3・11をきっかけに、それまでの人選を白紙に戻しました。もはや単なる娯楽番組を作る時で

はないと思つたのでしょうか。

最も被害の大きかった福島県、ひいては東北全体を元気にする、復興のエネルギーを送る番組にしたいということで、福島県出身者にターゲットを絞り直しました。この段階で地元が推挙している保科正之を選べば、福島県、NHKともに万万歳です。ところが決まったのは、タックホース以下であった八重。

私が思うには、NHKは保科正之を外した段階で、主演は女性にと決断したのではないのでしょうか。女性パワーの凄さを目の当たりにした女子サッカーの「なでしこジャパン」が活躍した年だからです。3・11で暗くなった日本に、勇気と元氣と感動を与えてくれた女子選手たち。この女性パワーを大河ドラマにもと、NHKは思つたのではないのでしょうか。

有力なヒロイン候補は ほかにもいた

では、女性なら八重がストレートに選ばれるかというところ、これがまた問題です。八重の時代に限定しても、会津には候補となるべき女性が数人います。その中で最

も有名なのが山川(大山)捨松です。男性のような名前ですが、本名は咲子。岩倉使節団に随行し、最初の女性留学生としてアメリカに渡りました。その際に母親が「あなたを捨てます、でも帰りをずっと待ちます」という意味から、捨てる、待つ(松)としたのです。

この人は八重とともに鶴ヶ城に籠城した女性の1人でしたが、日本の女性で初めてアメリカの大学を出て、英語も堪能。写真を見てもスリムでとても美形です。しかも夫は、日清・日露戦争で活躍し公爵・元帥にまで出世した薩摩藩出身の大山巖。長兄の山川大蔵造、次兄の健次郎も凄かった。特に健次郎はアメリカの名門・イェール大学で学び、後に東大や京大などの総長を4回務めています。捨松自身、「鹿鳴館の華」と呼ばれ、ダンスが得意で洋装も似合いましたから、八重と比べてもよほどテレビで映えます。

もう1人は、瓜生岩子。熱心な仏教徒で、仏の道を実践するために、恵まれない人、かわいそうな子どもたちのために一生を捧げました。いわば社会福祉事業のパイオニアです。その功績が称えられ、日本の女性で最初に藍綬褒章を与えられています。岩子は会津若松の少し北、喜多方の出身で、そこに

は瓜生岩子記念館があります。また、東京の浅草の浅草寺など全国に数体、銅像も建っています。

同志社は聖書の教えにしたがって人間の像は作りません。したがって新島襄の銅像（特に全身像）はありません。まして八重の銅像は、です。

山川捨松、瓜生岩子に、八重は一步も二歩もリードを許していません。でも最終的に、NHKは山川捨松も瓜生岩子も選びませんでした。彼女たち2人をはじめとする会津の数名の女性、それらをすべて押しつけ、八重は大河ドラマのヒロインに抜擢されたのです。

キヤラクターで大河の 主役を射止めた八重

私が思うに、NHKは2つの理由で八重をヒロインにしたのだろうと推測します。1つはキヤラクターです。記念館もない、銅像もない、学校を作ったわけではない、何

かを発明したわけでもありません。これといった業績のない一女性なのですが、キヤラクターに関してはライバルを超えます。八重は、とにかく男性的です。勇気と元気とバイタリテイ、こうした点では女性はもちろん男性にも負けないようなキヤラクターの持ち主です。NHKはこれに賭けたのだろうと思います。

そして、「八重の桜」というタイトル。内藤慎介プロデューサーが言っていますが、桜を持つてきた理由は3つです。春になれば必ず桜が咲きます。被災された方々に「頑張ってください」というエールを送るには、桜がベストだということを決まりました。その復興のシンボルである桜のイメージに、一番合ったのが八重だったのでしょう。

もう1つの理由、これはあくまでも私見ですが、実は八重は4年前、2009年4月22日にいち早く全国デビューしています。NHK総合テレビの「歴史秘話ヒストリア」で八重が紹介されました。放映後、もう一度見たいというアンコールの要望が大阪放送局に殺到したようです。実際何回か再放送されています。先月もそうでした。私はこの「歴史秘話ヒストリア」の評判が、今回の大河ドラマを作る決め手の1つになったのではないかと思っています。

3つのステージで描く 八重の生涯

八重は1845年に生まれ、1932年

まで生きました。86年の人生は長いですが、NHKはそれを3分割します。前半のヤマ場は1868年、江戸時代が終わって明治が始まる、近代社会の入口ですが、会津の人々にとっては新政府軍によって会津が滅ぼされた年です。その年を含む1845年から20数年が第1ステージ。そして、1875年に新島襄と出会い、翌年に結婚。新島襄は1890年、46歳で亡くなります。新島襄との夫婦生活を中心にした京都での約20年、これが第2ステージです。第3ステージでは、未亡人となった八重は日本赤十字社の正会員となり、日清、日露の戦争で篤志看護婦として活躍します。NHKは八重を第1ステージでは「会津のジャンス・ダルク」、第3ステージでは「日本のナイチンゲール」として描きます。

第2ステージで八重を形容する言葉は「ハンサムウーマン」です。この言葉自体は「歴史秘話ヒストリア」の女性ディレクターが作ったものですが、新島襄は八重と婚約した時にアメリカの恩人への手紙で、八重を「美人ではないが、生き方がハンサム」と紹介しています。信念の人、凜として生きた女性、それが第2ステージで描かれる八重です。

八重は夫の新島襄の死後、時間的にいえば彼の生涯をまるごと繰り返すような形で42年間生きました。だからこそ東北に元氣と勇気を運ぶメッセンジャーに選ばれたのです。「春にはきつと咲きます」という復興のシンボルとして描かれます。



ISAスタディーツアーで 本学学生スタッフが活躍!

1月17日～1月19日、日本で初開催となった国際的な研修会「ISA (Institute of Student Affairs)スタディーツアー」が本学で開催され、学生たちが運営スタッフの一員として活躍した。



ISAスタディーツアーには、アジア・環太平洋地域で学生支援に携わる教職員が参加し、今回は「キャンパスのグローバル化と学生支援」をテーマに、講演、キャンパスツアー、事例発表、グループワークを行った。

学生支援センターの公募で集まった33人の学生は、すべて英語で行われた開会式、閉会式、講演会、ウェルカムパーティー、フェアウェルパーティーの司会やキャンパスツアーの案内役、通訳、会場設営、宿泊施設(継志館)内のサポートなど多様なプログラムの運営を担った。開催日までの準備期間が極めて短く、学生スタッフチームは京都市内にある英語対応が可能な飲食店の紹介マップの作成や、本学の今出川キャン

パスと京都大学でのキャンパスツアー、相国寺(特別拝観)の案内などのために、様々な資料を英文化し、英語で説明するために精力的に練習をした。また研修会への参加や、各チームで自主的に勉強会(英会話力アップなど)を開くなど熱心に活動を展開した。

ISAプログラム全般を通じて、本学学生の基本的なスキル(英語力を含めたコミュニケーション能力、総合的人間力など)が非常にすぐれていることを改めて実感した。特に京都大学のキャンパスツアーでは、事前準備ができない質疑応答でも即時に通知し、そのレベルは海外からの参加者からも高い評価をいただいた。

海外からの参加者を大勢迎えた今回の研修プログラムが無事に成功した大きな要因のひとつに、熱意にあふれた優秀な学生スタッフの活躍があったといえる。

来年8月には、世界からさらに多くの参加者を迎えて「APSSA2014 in 京都」が本学を会場として開催される予定である。APSSA国際カンファレンスでは、世界の大学の教職員に加えて、加盟大学等の学生たちが参加して学生自身が主役となる国際会議も同時開催され



る。その際には、今回の学生スタッフと同様の運営を担う学生チームとは別に、世界の学生たちと議論し、自分たちの意見を発表する学生チームを編成することになる。本学の学生が中心となった日本の学生チームが、各国の学生チームと活発な議論を展開し、世界に向けて意見を発表してくれることを大いに期待している。

(京田辺校地学生支援課)

国連グローバル コンパクト:PRMEの アジア会議にて2位入賞

2012年12月8日～9日、慶應義塾大学にて行われた国連グローバルコンパクト:PRME(責任あるマネジメント教育原則)の第3回アジア会議の一環として、CSR(企業の社会的責任)や社会イノベーションに関する国際的ケースコンペティションが行われた。本学グローバルMBAの学生チームも参加し、全参加7チーム中、見事2位を獲得した。本学学生チームは、1年次生6人。多国籍メンバーで、出身地はアメリカ、カナダ、中国、インド、フィリピンとグローバルMBA学生のダイバーシティ(多様性)をそのまま反映している。学生が発表したケースは、「CSRと企業理念の統合について」・「キヤノンとニコンの事例から」であり、詳細な企業分析と比較が評価された。ペルー出身のグスタボ・タナカ ビジネス研究科准教授が指導にあたった。なお、同志社大学は国連グローバルコンパクトに、また、同

志社ビジネススクールは、国連グローバルコンパクト:PRMEに加盟している。

コンペ前日の8日には、グローバルMBAの教育・研究等について近藤まり子グローバルMBAコース長が講演し、革新的なプログラム内容であると多くの称賛を得た。

また、その流れを受けて、11日には、国連のPRMEのヘッドであるジョナス・ハートル氏が急遽、同志社ビジネススクールを訪ね、グローバルMBAの教員・学生に対して、リオ+20の成果、サステナブルなビジネス、PRMEの活動等についての講演を行った。

(ビジネス研究科)

ホームカミングデー 2012開催

2012年11月11日、今出川キャンパスにおいて第13回ホームカミングデーを開催した。

昨年同様、在学生と卒業生による実行委員会を設置し、「ホームカミングデーを卒業生と在学生がつながる機会にした」と知恵を絞り、企画から当日の運営まで行った。





当日は雨天にもかかわらず、野点や学生サークルによる展示・紫熱教室と各プログラムの、熱心にまた楽しそうに参加されている卒業生の姿が数多く見られ、大盛況であった。

中でも今年初めての取り組みである「OG・OB訪問 in CAMPUS」企画では、全国に広がる同志社校友会支部から支部長にお越しいただき、Uターン就職について相談する機会を設けたところ、学生から大変好評であった。キャリアセンターの協力を得て就職ガイダンスでピラ配りをした甲斐があり、当日は300人ほどの参加があった。予想以上の結果となり人の流れをコントロールできなかったという反省もあったが、学生・社会人の双方から「来年も続けて欲しい」という声があがった。

その他、昨年に引き続き、東日本大震災で被災した学生支援を目的としたオリジナルグッズ販売を企画製作段階から行い、収益金として約300万円の義援金を納めることができた。皆さまからの沢山のご協力に感謝申しあげるとともに、被災地の一日も早い復興を心よりお祈りしたい。

(校友・父母課)

2012年度秋学期外国語honors認定書授与式

クラーク館チャペルにて、2012年度秋学期の外国語honors認定書授与式を挙行した。外国語honors制度(外国語科目成績優秀者表彰制度)は、高度な外国語運用能力や国際的な視野と見識を備えた人材の育成を目標に、外国語について優秀な成績を修めた学生を表彰する制度で、2006年度春学期から導入している。

12月6日の授与式では、土田道夫教務部長の司会のもと、八田英二学長から祝辞が述べられ、外国語科目成績優秀者1人ひとりに認定書と記念品が手渡された。

認定を受けたのは、文学部6人、法学部4人、商学部1人、社会学部1人の計12人で、言語の内訳は、ドイツ語2人、フランス語1人、中国語3人、スペイン語1人、ハンガール1人、英語4人であった。認定書を授与された学生は、下記のとおり。

■外国語honors (ドイツ語)

三和奈美穂(文学部・2009年度生)
土井 薫子(法学部・2010年度生)

■外国語honors (フランス語)

坂野 春奈(文学部・2009年度生)

■外国語honors (中国語)

宇都宮理香(文学部・2010年度生)
南 彩夏(文学部・2010年度生)
池田 沙弥(法学部・2009年度生)

■外国語honors (スペイン語)

大谷 典子(文学部・2008年度生)

■外国語honors (ハンガール)

城戸ありさ(社会学部・2010年度生)

■外国語honors (英語)

柴田和紀子(文学部・2008年度生)
日置麻里奈(法学部・2009年度生)
松井 美依(法学部・2010年度生)
由井利紗子(商学部・2010年度生)

(教務課)

特定寄付奨学金募金協力者ご芳名

経済的理由で修学を続けることが困難になっている学生を援助するために、2004年4月から「同志社大学特定寄付奨学金募金」を広く社会各界に呼びかけています。

2013年1月末までに、卒業生、ご父母、一般の方々および教職員から以下のとおりご協力をいただきました。

2012年3月～2013年1月の申込者		
	申込件数	申込額
卒業生	61件	7,773,840円
ご父母	56件	5,370,000円
教職員	117件	13,143,840円
合計	234件	26,287,680円

【卒業生、ご父母、一般】

- 1,000,000円 塩尻恭子 深田三徳
- 900,000円 同志社生活協同組合
- 500,000円 深川晃而 同志社校友会
- 公益財団法人吉田育英会
- 300,000円 株式会社バンネット・システム
- 296,000円 森田秀夫
- 150,000円 門脇節
- 115,000円 水谷晴夫
- 100,000円 森田智恵子

【教職員】

- 50,000円 株式会社ヒーローインターナショナル 三原誠治
- 30,000円 柴田博昭 川向幹男
- 20,000円 奥村伸
- 18,840円 昭和37年卒今井俊一ゼミナール有志一同
- 10,000円 山下文憲 尾崎幸宏 松本邦博 坂入真之 甲木宏明 佐藤信夫 鈴木雄二 竹野篤一 渡辺弘道 岩本憲彦 棟廣武雄 今村浩一 5,000円 大塚征則 神原広泰 山中光太郎

【ご芳名のみ(金額非掲載)】

- 大鉢忠 三上保孝 小崎眞 藤原喜久雄 北山繁樹 豊田俊一 川野修平 小島弘 富岡努 奈良光浩 木村栄昌 山村偉一 水口潔 末永大志 荒渡良 永原裕夫 大嶋征夫 和田利一 加藤有己 本田肇 195,000円(匿名合計) 匿名7名

【ご芳名のみ(金額非掲載)】

- 1,010,000円 高田紀美
- 1,000,000円 田中憲次
- 1,500,000円 工藤和男
- 1,100,000円 齋藤憲道
- 1,000,000円 宇治郷毅 富田安信 西岡徹
- 600,000円 西川真司 三好博昭 植村巧
- 240,000円 今川晃
- 150,000円 石田修一
- 120,000円 北幸史
- 100,000円 吉川健 土佐卓司

兼重雅好 宮庄哲夫 浜中邦弘 藤井邦宏 越川弘英 新茂之 上田裕保 高田芳樹 林克樹 白石健治 戸田裕之 加藤千洋 酒井優 ダリシエミシエル 竹田宗継 里内仁美 1,175,000円(匿名合計) 匿名25名

*教職員の給与控除については2013年度までの申込を受け付けていますが、今回は2012年度寄付額(2012年4月～2013年3月)のみの金額を掲載しています。

当募金は継続的に行っていますので、引き続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

【お問い合わせ先】財務部資金課
TEL: 075-251-3150
e-mail: ji-sikin@mail.doshisha.ac.jp

新任教員紹介

① 授業科目を担当する専任教員を紹介します。
② 所属学科/専攻
③ 職名
④ 主な担当科目



中村 拓也
(なかむら たくや)
①文(哲)
②助教
③現代哲学(1)



大愛 崇晴
(おおあい たかはる)
①文(美学芸術)
②准教授
③音楽学概論Ⅱ



垣見 修司
(かきみ しゅうじ)
①文(国文)
②准教授
③日本文学講読(上代A)



河野 道房
(こうの みちふさ)
①文(美学芸術)
②教授
③日本美術史概説(2)



木谷 佳楠
(きたに かなん)
①神(神)
②助手



森山 央朗
(もりやま てるあき)
①神(神)
②准教授
③クラーアン・ハーティース学



飯田 健
(いいた たけし)
①法(政治)
②准教授
③政治行動論



釜田 薫子
(かまた かおるこ)
①法(法律)
②教授
③金融取引法



William Robert STEVENSON III
(ウリアムロバートステイブソン)
①社会(教育文化学科)
②助教
③Globalization and Education(1)



佐藤 翔
(さとう しょう)
①社会(教育文化学科)
②助教
③図書・図書館史



樋口 純平
(ひぐち じゅんぺい)
①社会(産業関係学科)
②准教授
③グローバル人的資源管理論Ⅰ



池田 謙一
(いけだ けんいち)
①社会(メディア学科)
②教授
③メディア心理学Ⅰ



永田 修一
(ながた しゅういち)
①商(商)
②助教
③基本統計学



小山 治
(こやま おさむ)
①商(商)
②助教
③アカデミック・リテラシーⅠ、ビジネス・トピックス



安藤 崇
(あんどう たかし)
①商(商)
②助教
③簿記学Ⅰ、簿記学Ⅱ



長澤 勢理香
(ながさき せりか)
①経済(経済)
②助教
③基礎演習



中谷 直司
(なかたに なたし)
①法(政治)
②助教
③政治学入門



金 春
(きん しゅん)
①法(法律)
②准教授
③破産法



間 博人
(あいだ ひろと)
①理工(インテリジェント情報工)
②助教
③オペレーティングシステム



土井 貴之
(どい たかゆき)
①理工(機能分子・生命)
②准教授
③無機機能物質化学Ⅰ



松村 恵理子
(まつむら えりこ)
①理工(機械システム工)
②准教授
③熱力学Ⅰ



木村 佳文
(きむら よしひみ)
①理工(機能分子・生命化学)
②教授
③物理化学Ⅳ



岡田 彩
(おかた あや)
①政策(政策)
②助教
③アカデミック・スキルⅠ



北村 貴
(きたむら たかし)
①政策(政策)
②助教
③アカデミック・スキルⅠ



佐野 楓
(さの かえで)
①商(商)
②助教
③アカデミック・リテラシーⅠ、ビジネス・トピックス



大江 洋平
(おおえ ようへい)
①生命医科(医情報)
②准教授
③化学



小林 耕太
(こばやし こうた)
①生命医科(医情報)
②准教授
③神経機能計測



吉川 研一
(よしかわ けんいち)
①生命医科(医情報)
②教授
③物理学Ⅰ



池川 雅哉
(いけがわ まさや)
①生命医科(医生命システム)
②教授
③神経情報伝達制御学



宋 光輝
(そう こうき)
①理工学
②助手



吉田 雅一
(よしだ まさかず)
①理工(インテリジェント情報)
②助教
③情報理論



三木 啓司
(みき ひろし)
①理工(電子工)
②助教
③解析学Ⅰ



向 正樹
(おかい まさき)
①グローバル地域文化(グローバル地域文化)
②准教授
③アジア・太平洋地域文化の形成Ⅰ



小野 文生
(おの ふみお)
①グローバル地域文化(グローバル地域文化)
②准教授
③グローバル地域文化の基礎



菊谷 まり子
(きくたに まりこ)
①心理(心理)
②助教
③心理学実験演習



吉澤 睦子
(よしざわ 睦こ)
①スポーツ健康科(スポーツ健康科)
②助教
③基礎実習



若原 卓
(わかほら たく)
①スポーツ健康科(スポーツ健康科)
②助教
③基礎実習



上林 清孝
(かみばやし きよたか)
①スポーツ健康科(スポーツ健康科)
②准教授
③健康科学特論



山本 詩子
(やまもと とうこ)
①生命医科(医情報)
②助教
③医情報実験Ⅰ(1)

本学教員の執筆図書を紹介 図書館調べ(価格は税別)



張 軼欧
(ちょういつおう)
①グローバル地域文化(グローバル地域文化)
②准教授
③アジア・太平洋言語・文化論1



Aysun UYAR
(アイスン ウヤル)
①グローバル地域文化(グローバル地域文化)
②助教
③グローバルイシュー(社会開発論)



尹 慧瑛
(ゆんへん)
①グローバル地域文化(グローバル地域文化)
②准教授
③ヨーロッパの課題1



藏本 一也
(くらもと かずや)
①ビジネス(ビジネス)
②教授
③コーポレートガバナンス



浅野 有紀
(あさの ゆき)
①司法(法務)
②教授
③法理学



Shaun GATES
(ショーンゲイツ)
①グローバル地域文化(グローバル地域文化)
②准教授
③イングリッシュ・プラクティクム2



岡部 晋典
(おかべ ゆきのり)
①学習支援・教育開発センター
②助教



清水 亮
(しみず りょう)
①学習支援・教育開発センター
②准教授



Timothy J. CRAIG
(ティモシー クレイグ)
①ビジネス(ビジネス)
②特別客員教授
③Business of Japanese Pop Culture

精神障害者のための効果的労務支援モデルと制度
山村じつ子 著 ミネルヴァ書房 6,500円

女性と学歴
橋本俊昭 著 勁草書房 2,500円

最新の財産判例集
井関涼子 他 著 青林書院 1,300円

ヨーロッパ私法の現在と日本法の課題
野々村和善 大中裕信 他 著 日本評論社 7,600円

IFRS時代の最適開示制度
古賀智敏 編 古賀智敏 他 著 千倉書房 4,600円

エルンスト・カッシーラーの哲学と政治
馬原潤二 著 風行社 1,100円

ウィーン売買条約の実務解説 第2版
高杉直 他 著 中央経済社 4,000円

原発とキリスト教 私たちはどう考える
小原克博 他 著 新教出版社 1,600円

金融システム 第4版
鹿野嘉昭 他 著 有斐閣 2,000円

ブルラモン 単数にして複数の存在
清水穰 著 現代思潮新社 2,600円

知的システム工学
三木光範 著 共立出版 2,500円

アクセス日本政治論 新版
森裕城 他 著 日本経済評論社 2,800円

交通経済ハンドブック
青木真美 石田信博 他 著 白桃書房 3,300円

兵庫近代文学事典
佐伯順子 真鍋正宏 田中勲儀 西川貴子 他 著 和泉書院 5,000円

不正取引規制・課徴金・罰則
松尾健一 伊藤靖史 川口孝弘 他 著 商事法務 8,200円

経営行動科学ハンドブック
藤本哲史 他 著 中央経済社 9,200円

ほどほどに豊かな社会
橋本俊昭 他 著 ナカニヤ出版 1,800円

統計応用の百科事典
金明哲 他 編 津村弘正 鄭麗軍 村上征勝 他 著 丸善出版 2,000円

新太陽エネルギー利用ハンドブック
石原好之 他 著 日本太陽エネルギー学会 2,500円

激論・世紀末ニッポン
浅野健一 他 著 三書房 7,500円

「通貨」を知れば世界が読める
浜野子 著 PH.D.研究所 800円

成熟ニッポン、もう経済成長はいらない
橋本俊昭 浜野子 著 朝日新聞出版 7,600円

貧困と社会保障制度
伊多波良雄 塩津ゆりか 著 晃洋書房 2,700円

レーガン
村田晃嗣 著 中央公論新社 800円

退職教員 2013年3月31日付で、次の先生方が退職されました。

- 神学部 本井康博 教授
- 文学部 駒木敏 教授
- 文学部 長澤邦彦 教授
- 文学部 太田孝彦 教授
- 社会学部 宇治郷毅 教授
- 社会学部 青木貞茂 教授
- 法学部 橋本卓 教授
- 法学部 櫻井利江 教授
- 法学部 Stephen GREEN 准教授
- 法学部 綾部六郎 助教
- 法学部 毛利亜樹 助教
- 経済学部 馬場浩也 教授
- 経済学部 末永國紀 教授
- 経済学部 上ノ山賢一 助教
- 経済学部 三俣延子 助教
- 経済学部 西圭介 助教
- 経済学部 小田勇一 助教
- 経済学部 奥田以在 助教
- 経済学部 塩津ゆりか 助教
- 経済学部 菅原千織 助教
- 経済学部 米崎克彦 助教
- 経済学部 岡本博公 教授
- 経済学部 太田進一 教授
- 経済学部 松本敏史 教授
- 商学部 稲井誠 講師
- 社会学部 青木貞茂 教授
- 社会学部 宇治郷毅 教授
- 社会学部 林敏彦 特別客員教授
- 政策学部 杉田菜穂 講師
- 理工学部 高野頌 教授
- 理工学部 渡辺陽一郎 教授
- 理工学部 青山宏 教授
- 理工学部 土屋和雄 教授
- 理工学部 木村恭之 助教
- 理工学部 向平敦史 助教
- 生命医科学部 横内久猛 教授
- スポーツ健康科学部 小森康加 講師
- スポーツ健康科学部 小屋菜穂子 助教
- 心理学部 上北朋子 助教
- グローバル・スタディーズ研究科 細谷正宏 教授
- ビジネス研究科 白石健治 教授
- ビジネス研究科 山口薫 教授
- ビジネス研究科 Andrew STAPLES 准教授
- 言語文化教育研究センター 泉尾洋行 教授
- 言語文化教育研究センター 名和又介 教授
- 言語文化教育研究センター 山田眞實 教授
- 言語文化教育研究センター 王周明 助教



小島 直子
(こじま なおこ)
①全学共通教養教育センター
②助教
③Intensive Courses for TOEFL(Practice)(Tutorial)



和泉 絵美
(いずみ えみ)
①全学共通教養教育センター
②准教授
③Intensive Courses for TOEFL(Practice)(Tutorial)



荒井 美幸
(あらい みゆき)
①日本語・日本文化教育センター
②助教
③日本語



丸田 祥一
(まるた しょういち)
①全学共通教養教育センター
②助教
③Intensive Courses for TOEFL(Practice)(Tutorial)



岩本 悠宏
(いわもと ゆうひろ)
①高等研究教育機構及び理工学部
②助教
③機械設計製作



築山 さおり
(つぎやま さおり)
①日本語・日本文化教育センター
②助教
③日本語

I was born in a hamlet of New York state, with a population of around 2000. My father, who has an interest in Japan, came several times for business, and he'd always bring back a Japanese toy for me. And with it, he'd bring back a bit of Japanese culture in his heart. He began to place paper lanterns, tatami, and zabuton around our house, our family visited one of New York's Zen temples, and he started painting with a Japanese style. Then, when I was ten, my father and I traveled to Japan together. Thus, it was thanks to my father that I was introduced to Japanese culture.

I fell in love with it. Compared to my hometown, Japan seemed like a new world. Zen resonated with my own ways of thinking. Japanese paintings are some of the most beautiful I've seen. I love Wabisabi and other Japanese aesthetics, and I became very interested in the seemingly polite and tranquil Japanese lifestyle.

Therefore, when I was able to study abroad, I chose Japan immediately. It seemed too good of a chance to pass up. But being in Kyoto has been an even better experience than I expected. Doshisha University, located in Kyoto-the old capital of Japan, nevertheless has a cosmopolitan way of thinking that I really like. Over these last eight months, my host family has become an irreplaceable part of my life, and I'm extremely grateful to the teachers and friends from whom I've learned so much. I've been able to discover the good things about both America and Japan from an objective standpoint. When I have to return to America at the end of this month, I will be bringing back Japanese culture in my heart to educate my friends and family. This is not an ending; the connection I've made with Japan will be a part of me for the rest of my life.

Nikolai Muth

僕はニューヨーク州にある人口約2000人の田舎町で育った。父は日本に興味があり仕事でも数回来日し、お土産に必ず日本のオモチャと日本の心を一緒に持ち帰ってくれた。また父は家に提灯や畳、座布団を置いたり、家族をニューヨークの禅寺に連れて行ったり、日本的な絵を描くようになった。10歳の時に父と一緒に旅行をして、日本と初めて出会った。日本の文化に触れることが出来たのは、父のおかげである。

僕は恋に落ちた。育った環境に比べて、日本は新しい世界だった。禅宗は自分の考えに合った。日本の絵画ほど美しいものはないと思う。わびさびや他の日本の美意識が大好きで、また日本人の礼儀正しくて穏やかそうな生活に夢中になった。

だから、留学を考えた時、すぐに日本を選択した。日本に行かないことは僕にとって大きな損だと思った。そして京都を選んだことは想像以上に良いことだった。日本の古都、京都にある同志社大学は国際感覚に優れていると思う。この8カ月間でホストファミリーは僕の人生にとってかけがえのない存在になり、知り合った先生方や友達からはたくさんのお話を学ぶことができ感謝している。また、日本とアメリカの良いところを客観的に見ることができた。

今月末にアメリカに帰ることになってしまうが、僕が得た日本の心を家族や友達に伝えていきたいと思う。これが終わりではなく、これからも僕と日本の関係は続いていく。

ニコライ・ミュズ

2012.9 ~ 2013.4 AKP同志社留学生センターに在学
(USA出身)



プロ野球 東京ヤクルトスワローズ内野手

宮本 慎也さん

協力・グラランドプリンスホテル京都(京都市左京区)

インタビュー
佐々木 彩さん
〔文化情報学部1年次生〕



佐々木 ● 2012年に41歳5カ月での2000本安打達成、おめでとうございます。そのヒットの感触は覚えていらっしゃいますか。

宮本 ● 抜けていったのはわかりました。でも、自身の気持ちとしてはうれしさよりも、私自身の気持ちとしてはうれしさよりも、私自身の感じが強かったです。記録を前にちよつと足踏みしていましたし、達成時期も遅かったと自分の中では思っています。覚えていてという意味では、2000本目よりプロ初安打の方が鮮明ですね。

佐々木 ● 宮本さんは守備力を高く評価される選手のイメージが強いのですが、バッティングで心がけてこられたことはあるのでしょうか。

宮本 ● 右方向に打つ、バントを決める、ピッチャーに少しでも多く球数を投げさせる。そういうチームのためになるバッティングを心がけてきました。もちろんヒットを打ちたいという気持ちはありますが、それよりも自分の役割を全うしようという考えの方が強いですね。

佐々木 ● 阪神の金本選手など、同年代の選手が昨シーズンで引退しましたが、その中で宮本さんは現役続行という選択をされました。やはり現役へのこだわりは強

くお持ちなのでしょうか。

宮本 ● もちろん1日でも長くプロで選手生活を送れればいいと思うのですが、実は昨年、1度辞める気持ちになったんです。

佐々木 ● それはどういうことですか。

宮本 ● 夏場にケガをしたんです。突発性ではなく疲労性のものだったので、自分の中で「そろそろ限界かな」という気持ちになりました。また、ちよつどシーズンの順位が決まってくる大事な時期と重なってしまったので、そこで1カ月休むことが自分の中でも許せなかったんです。球団には「辞めます」と話をしましたが、私がプロ入りした時の担当スカウトだった小川淳司監督に「もう1年残ってほしい」という言葉をいただき、「監督のために頑張ろう」という決意で続けることにしました。

佐々木 ● 私の家族はヤクルトファンなので、現役続行のニュースをお聞きしう



今回の同志社人

宮本 慎也さん
[1994年商学部卒業]

1970年生まれ、大阪府出身。PL学園から同志社大学、プリンスホテルを経て、1995年ドラフト2位でヤクルトスワローズ入団。堅実な守備は名手と謳われ、ゴールデングラブ賞を遊撃手で6度、三塁手で3度獲得。2001年にはシーズン犠打数67を記録。それまでの日本記録を更新した。プロ18年目の2012年5月、2000本安打を達成。41歳5カ月での到達は、41歳4カ月の落合博満氏を抜く最年長記録。同9月には史上3人目の通算400犠打も達成しており、名球会入りしている打者で2000本安打・400犠打を記録している唯一の打者。今季からは兼任コーチとして選手の指導にも当たる。



本昌さん。すごく足が震えて、キャッチャーに気づかれてしまうのではないかとというくらいに緊張して打席に立ったことを覚えています。

佐々木 ● 野球を続けてきてよかったと思うのはどんな時ですか。

宮本 ● 様々な人に出会えたことですね。普通に過ごしていたら出会えなかったと思う人たちがたくさんいます。ほかのスポーツでも言えることもありますが、

佐々木 ● 学生時代の経験で、今に活かしていることはありますか。

宮本 ● PL学園は野球の上手な人が集まり、高いレベルでしごきを削ってレギュラー争いをする。しかも甲子園で優勝しないと評価されない。そういう高校だったので、

は出られないかもしれない中で努力する先輩や後輩の姿を見て、私自身、野球人としての幅が広がりました。一生懸命やることの美しさや相手に対する思いやり、そういう野球の技術以外にも大事なことを教わったという意味で、大学時代は私にとってとても貴重な時期だったと思います。

佐々木 ● づらいと思う時、挫折を感じる時はありますか。

宮本 ● しょっちゅうです(笑)。大学時代で言うと、大学野球の最後のプレーが自分のエラーなんです。同級生に大学の4年間で野球を辞めるといふ選手が2人いて、彼らのためにもう1試合と思っていたのに、私のミスでサヨナラ負けをして4年間で終わった。その時の落ち込みというのは尋常

しかったです。これまでのプロ生活で特に思い出に残っているプレーはありますか。

宮本 ● 強烈に残っているというのには、あまりないですね。強いて言えば、代打でプロ初出場した時でしょうか。ピッチャーはまだ現役でプレーされている中日の山

しれません。そういう「人との出会い」が野球をやっているとよかったと思う点です。

佐々木 ● 野球を始めたきっかけを教えてください。

宮本 ● 父の影響です。父が大の長嶋さんファンで、小さい時から一緒にキャッチボールをやって、小学校3年生の時に近所の野球チームに入りました。

大学に入って初めて知りました。それまでは結果だけを求めて、いい成績を上げて、プロに行つて活躍するのが野球だと思っていたのですが、頑張っても試合に

ピククの正式種目になることがわかっていたので、代表に選ばれるには東京へ行ったほうが有利なのではないかと考えていたのです。それが、同志社大学に進学したPL学園の先輩たちが、わざわざ私が暮らすPLの寮まで来られて「一緒にやろう」と。先輩方の強い気持ちが伝わり、同志社大学で野球をやりたいと思ったのです。



佐々木 ● 小さい頃から野手で。

宮本 ● 小学生の時はピッチャーでした。中学でも多少やっていましたから、野手に専念したのは高校からです。

佐々木 ● 高校卒業からプロに入る選手もいる中で、なぜ同志社大学に進もうと思ったのですか。

宮本 ● 高校卒業の時、プロ入りの話はまったくありませんでしたからね。最初は東京の大学に行くつもりでした。野球がオリン



(C)ヤクルト球団

※2012年撮影



ではありませんでしたが、私にはまだ野球をやるチャンスがありましたから、その後しっかりとやれば同級生も喜んでくれると思っただけで一生懸命やりました。

佐々木 ● そんな時にはどうやって立ち直るのですか。

宮本 ● ある人から「勝ち続けるのが強い人じゃない。負けた時にいかに立ち上がるか、立ち上がった人が強い人だ」という言葉を、北京オリンピックで負けた時にいただきました。挫折したからこそ、次は失敗しないようにしよう、頑張ろうという気持ちになる。現実を受け止めないといけないし、そこから逃げているといつまでもなかなか次に進めない。失敗は誰にでもあるのですから、それを潔く認めて反省することが次に進める条件だと思っております。実はそういうことを痛感した出来事が大学時代に



もあつたんです。

佐々木 ● それはどんなことだったのですか。

宮本 ● 大学1年次の秋のリーグ戦中、雨でグラウンド状態が悪く練習もままならなかったのですが、4年次生のピッチャーの先輩が小雨の中を一生懸命走っていたのに、私と先輩の何人かはブルペンの横で遊んでいた。技術顧問の先生から「最後のシーン、一生懸命やっている4年生がいるのにお前は何をやっているんだ」と怒られ、監督からは反省のレポートを書いて来いと言われました。ところが、書いて出したら「全部言い訳だ。どうにかして逃れようとしている文章だ」と言われたのです。そして「失敗は誰にでもある。それを認めないとお前はまた同じことをする」と。素直に失敗を認めて反省するからこそ、次に同じ失敗をしないんだ」と監督に言われ、その時に初めて「いつも自分はそうやって失敗するこ

とから逃げてきた」と気づいたのです。一生懸命やった上での失敗なら仕方ないし、それを認めて次に活かせれば恥ずかしいことではない。私はもともと誰かの陰に隠れて自分から前に出ていくタイプではなかったのですが、それからは野球と向き合う姿勢も大きく変わりました。

佐々木 ● 宮本さんは大学時代からキャプテンのイメージが強いですから、そんなことがあつたとは少し意外です。最後に、大学時代にしておくべきこと、在学生へのアドバイスをお願いします。

宮本 ● 学生時代は多くの経験ができるチャンスがありますが、基本的には学費を親に払ってもらうことになりました。ですから、学生生活を支えてくれる人のありがたみを感じ、感謝して4年間を過ごすことが一番大事なことでないかと思えます。私自身、それに関しては後悔している部分でもあるので、あれをやりたい、これをやりたいと主張するだけでなく、学生生活を送れることに、常に感謝の気持ちを持ってほしいですね。

佐々木 ● ヤクルトの優勝のために今シーズンも活躍されるよう期待しています。そして全国のファンや私たち後輩のためにも、1日でも長く現役を続けていただけたらうれしいです。本日はありがとうございました。

INTERVIEWER

佐々木 彩さん
文化情報学部1年次生

滋賀県出身。同志社高校から大学へ。入学と同時に同志社大学体育会機関紙「同志社スポーツアトム」編集局に所属。現在は水泳部と自動車部を担当し、取材活動に勤しむ日々。自身にスポーツのキャリアはないが、春と夏には必ず甲子園に出かけるなど、大の高校野球ファン。将来はスポーツライターとして活躍することを目指している。

取材する側とされる側、常に人と人のかかわり合い

家族がヤクルトファンで試合を観に行ったこともあり、今日はお会いして直接お話が聞けたのでとても光栄でした。宮本さんには現役へのこだわりについて一番聞きたかったのですが、プロ野球は20代でも戦力外通告を突きつけられる厳しい世界。そこで40代で頑張っておられるというのはすごいことだと改めて思いました。お話の中では「失敗を素直に受け止めてはいけない、受け止めてそこから立ち上がっていくことが大事だ」という言葉が印象に残りました。失敗は誰でもすること、私たちみんなにも言えることだと思ったからです。取材される側の考え方として、取材する時は素直にストレートに聞いたほうがいいとご助言いただいたのも、私にはとても参考になりました。記者の仕事は、常に人と人のかかわり合い。私の立場はまだ学生記者ですが、将来、仕事として取材する時も、選手の方々とは素直な気持ちで向き合っていきたいと思いました。

経営的な視点から周囲を説得し、 団結力で価値ある新商品を 生み出す。

3年間ほどドラッグストアの営業を担当し、社内公募制度「ジョブチャレンジ」で、男性化粧品「ウーノ」チームへ配属されました。以来、マーケティング部門に在籍して4年になります。現在は、医薬品IHD A D A（エイハダ）のプロモーションを担当しています。

「ウーノ」チームは、若い男性をターゲットにした商品開発のプロジェクトであるため、化粧品に興味がある若い男性社員を求めています。商品開発は私にとって念願の仕事だったため、うまくマッチングして、憧れの部署で仕事ができるようになったのです。しかし、外からは華やかに見える仕事も、常に新たなアイデアが求められる厳しさがあります。ゼロから何かを企画し、それを形にしていくことがどれほど大変かを実感しました。

モノづくりはひとりでは何もできません。研究、宣伝制作、物流、営業など、多くの関連部門に力を貸してもらう必要があります。立場が異なる社員に、利害関係を越えたところで協力してもらうためにはやはり説得力が必要不可欠ですが、損得を並べ立てるだけでは説得力がありません。

それに加えて、熱意を持って粘り強く自分の提案を伝えるように心がけています。これは、大学時代に軽音楽サークルの仲間と一緒に、ひとつの音楽をつくり上げていった経験が原体験になっているのかもしれません。

現在の担当は、医薬品ブランドなので、化粧品とはまた違う難しさもあります。が、仕事はどんどん楽しくなっています。社内では、医薬品事業は化粧品事業に比べて組織が小規模なので、働いている人の動きをよく見通すことができますし、事業の進み方にスピード感もあります。事業全体を客観的に把握し、問題解決の能力を身につけられること、そして自分が知りたいと欲すれば、いくらでも吸収できるところが魅力です。

IHD A D A（エイハダ）は、ブランドとしてはまだ完成形ではありません。売上規模が十分ではないので、広告投資が難しい側面もあります。プロモーション担当は、プロモーション企画を経営トップに提案して予算を確保することも重要な仕事で、承認を得て初めて関連部門と商品プロモーションの方法などを詰めていくこ

とができます。「銀行に融資をお願いするのと似ている」というのは先輩社員の弁ですが、会社の事業計画を提案するようなもので、経営の疑似体験ができる仕事です。

私は、他部門の人たちに納得して気持ち良く動いてもらえるようにすることがマーケティング担当者の大切な仕事だと思っています。説得力を高めることができれば、みんながより団結できるはずですから、現在も、現在の環境で勉強を続けながら、経営的な知識や経験を身につけ、消費財のマーケティングのブランド担当者として一流になることを目指しています。

内山 正信さん【2006年 経済学部卒業】

株式会社資生堂 ヘルスケア事業部 マーケティング1グループ

内山さんは、秋採用で資生堂に入社を決めた。多くの友人が春採用で就職先を決める中、IT関連の企業など数社から内定を得ながら「夏までは閑々としていた」そう。その理由は「メーカーに就職したいという思いが、日に日に強くなった」ため。「もう1度チャレンジしてみよう」と気持ちを切り換えて秋採用に応募する。辛い時は、友人たちと話をすることが心の支えとなり、自分がやりたいことを見出していくヒントにもなったという。「ひとりで悩んでいても、自分の言葉の中でしか考えが浮かばない。いろいろな人と話をして、視野を広げれば、また新たな考えも浮かぶと思います。就活はとても苦しい時期ですが、「自分は何をやりたいのか」を突き詰めていけば、きっと道は開けると思います。頑張ってください!」と、在学生へのメッセージをくれた。

自力で習得した語学力を糧に、 海外事業の最前線で戦う日々。

文学部の英文学科に入学したのは、卒業後に語学力を活かして仕事をしたいという思いからでした。しかし、当時は学内に外国人の先生はいらっしゃっても、スピーキングを学ぶ機会になかなか恵まれません。自分で何とかしなければと、4年次の1年間で、休学してアメリカに留学しました。3カ月ほど語学学校に通い、さらに半年間、カリフォルニア州サンディエゴにあるワールドトレードセンターで、アメリカ国内外の企業同士を繋ぐ業務のインターンシップを経験。グローバルな仕事をしたという意欲がさらに膨らみました。

東芝に入った理由は、広く海外展開を行っている企業であること、多くの人と関わりをもちながら全体を引っ張る仕事をしたいという、自分の志に合致したことです。入社後、最初に配属されたのは社内カンパニーの社会インフラシステム社。まずは国内向けにインフラを構築する事業で、大型公共設備を納入する案件を担当しました。短期工程の中、人員の配置から工事の進捗まで、営業がすべてをコントロールしなくてはなりません。特に入社3年目に担当した大規模案件では、実質的な営業担当者は私1人で多忙を極めました。

現場に足しげく通うなどした結果、顧客と利用者ニーズに応える画期的なシステム構築を行ったと評価され、社長表彰を受けました。

4年目には、英語力をかかっていただき、新設された部署に異動。インフラシステムを海外に売り込んでいく仕事を、ゼロの状態から立ち上げました。どこへ、何を、どうやって売るのか。最初は見当もつきませんでしたね。外国に製品を納めるためには安全性の基準など多くのハードルがあります。それを一つひとつクリアした上でようやく社内での承認を受けても、入札に参加して受注できなければ結果は残りません。新事業のため、アドバイスしてくれる人もいませんし、お客様とコンタクトを取る方法を探すことから始めました。6年目にはシンガポールへ半年間の長期出張を命ぜられ、たった1人でアジアでの案件探しも経験しました。最終的には現地企業と提携し、アジア諸国へ協業して参入する道筋をつけることができました。今振り返ると仕事に没頭し、海外出張による時差等で体力的にもきつかったですが、とても充実していましたし、グローバルに仕事をしていくための基盤をつくり上げることができ

た3年間だったと思います。

昨年4月に電力システム社に異動し、今は北米向けに火力プラントシステムを輸出する業務に携わっています。こちらは東芝の中でも長い歴史があり、海外にも多くのプラントを納めている実績があります。現在進行している案件がいくつもあり、新しいことをどんどん吸収する毎日。これから先も、チャレンジを続ける中で、ノウハウをさらに積み上げていくつもりです。

落合 瑛里子さん【2006年 文学部英文学科卒業】

株式会社東芝 電力システム社 火力・水力事業部 海外火力営業第2部 海外営業第3担当

留学するという夢を果たすために、1年次生の時からアルバイトをして費用を捻出。留学先も自分で見つけた。「海外へ行くと、国内にはわからなかった日本の良さが見えてきます。その経験から日本という国を外国に発信していきたいと思うようにもなりました。学生の皆さんも時間のある大学時代に、ぜひ海外の生活を体験してほしいですね」と、海外体験を勧める。東芝への入社時、最初に所属した社会インフラシステム社では初の女性営業担当だった。「どんな服装で行けばいいのかわからず、官公庁にスカートを着いて行って怒られました」と笑うが、「今いる部署では以前から女性の営業職が多く、私の上司も2人のお子さんを育てながら仕事を続けています。理想の姿です」。2009年に結婚。自身も子育てと仕事を両立していきたいと話す。

♪観に行こう聴きに行こう♪—学生団体4月～5月の活動予定—

【寒梅館クローバーホール】

- 4月11日(木) 喜劇研究会 お笑いライブ 12:30～13:00 無料
- 4月27日(土) 同志社自主制作映画サークルF.B.I. 新歓上映会 12:00 無料

【寒梅館ハーディーホール】

- 4月27日(土) 邦楽部・雅楽会・能楽部観世会・金剛会・宝生会・狂言会 伝統芸能ブロック合同舞台 13:00 (12:30～) 無料
- 5月3日(金・祝) ギタークラブ 第51回同志社・立教ジョイントコンサート in京都 16:30 (16:00～) 無料

【学外】

- 4月21日(日) マンドリンクラブ 全日本学生マンドリン連盟 京都ブロック 第50回合同演奏会 18:00 (17:15～) 無料 京都府長岡京文化会館
- 5月26日(日) 能楽部宝生会 京都宝生流学生能楽連盟 春季発表会 12:30頃予定 無料 大江能楽堂

応援に行こう!～体育会試合日程

開催日時、開催場所、対戦校、料金等は変更されることがあります。

【ボクシング部】第67回関西学生ボクシングリーグ戦

会場:関西大学千里山キャンパスボクシング場

- 5月12日(日)・19日(日)・26日(日)・6月2日(日)・9日(日)・16日(日) 11:00～

対戦校:龍谷大学、大阪商業大学、関西学院大学、大阪大学、関西大学

【準硬式野球部】平成25年度関西六大学準硬式野球春季リーグ戦

- 4月4日(木) 14:00～ 5日(金) 11:30～

対戦校:神戸大学 会場:皇子山球場

- 4月11日(木) 11:30～ 12日(金) 9:00～

対戦校:大阪大学 会場:大阪南港中央球場

- 4月18日(木) 9:00～ 19日(金) 14:00～

対戦校:立命館大学 会場:わかさスタジアム京都

【ソフトテニス部】平成25年全日本大学ソフトテニス王座決定戦

- 6月4日(火)～6日(木) 会場:東京体育館

学生保健部会 献血・アルコールパッチテスト

【献血】

今出川校地 4月19日(金)10:00～15:30 (新町キャンパス)

京田辺校地 4月18日(木)10:00～15:30 (ラーネッド記念図書館裏)

【アルコールパッチテスト】※定員に達し次第終了。

今出川校地 4月3日(水)～6日(土)9:00～16:00 (新町キャンパス)

京田辺校地 4月4日(木)～6日(土)9:00～16:00 (知真館3号館入口)

【お問い合わせ先】学生生活課(今出川) TEL:075-251-3083

学生生活課(京田辺) TEL:0774-65-7429

第31回函館キャンプ参加者募集

創立者・新島襄が1864年に国禁を犯して脱国した地、北海道函館市を訪れます。新島襄の生き方に触れ、人と人とのふれあいの中で自分自身を見つめ直すという趣旨で行われます。学生が主体となって作り上げるプログラムです。

【実施期間】8月中旬 ※出発前に5回程度のミーティングを行います。

【お申し込み】4月下旬～5月下旬

【参加費用】29,000円(予定)

【お問い合わせ先】今出川校地学生支援課 TEL:075-251-3270

※今出川校地、京田辺校地で、それぞれ説明会を開催します。詳細は後日HPなどでお知らせします。

熊本キャンプ参加者募集

同志社開校の翌年、熊本洋学校の卒業生や在校生約40人が同志社に入社しました。彼らはのちに日本のキリスト教史上「熊本バンド」と呼ばれることになる秀才揃いで、「同志社のもうひとつの源流」を作ったと言えるほどの強烈な個性をもつ存在です。この熊本キャンプでは、彼らの生き様や熊本と同志社の関わりを、事前学習や現地での研修を行うことによって学

び、同志社を見つめ、自らを省みる時間をもつことを目指しています。

【実施期間】9月4日(水)～6日(金)の2泊3日

【募集人数】20人程度 【参加費用】20,000円程度

【説明会】今出川 5月13日(月)17時～

キリスト教文化センター集会室(クラーク記念館1階)

京田辺 5月14日(火)15時30分～

キリスト教文化センター講座室(夢告館西隣・キリスト教文化センター内)

【お申し込み・お問い合わせ先】

今出川校地キリスト教文化センター TEL:075-251-3320

京田辺校地キリスト教文化センター TEL:0774-65-7370

ROOM記念館プロジェクトメンバー募集!

同志社ROOM記念館では、毎年、様々なテーマでITやデジタルコンテンツの制作、活用をめざす1年間のプロジェクトが活動しています。現在、本年度採択されたプロジェクトに参加するメンバーを募集しています。

同志社大学・女子大学の学生を中心に、学部学科を越えた多様なメンバーで構成されたプロジェクトチームによる活動だから、刺激も学びもいっぱい。5月には、プロジェクトメンバーを対象にしたワークショップなど、活動のスタートをスムーズにするためのプログラムも用意しています。プロジェクトの一覧やメンバー申込票のダウンロードは、ROOM記念館ホームページ(<http://roh.m.doshisha.ac.jp/>)からどうぞ。

メンバー募集に関するイベント

- 4月3日(水)～5日(金)10:00～15:00 「プロジェクト説明会(個別対応)」

- 4月18日(木)16:45～19:00 「スタートアップ報告会・交流会」

- 4月22日(月)～26日(金)16:40～18:40 「プロジェクト個別説明会」

その他にも、ランチタイムにプロジェクト紹介のイベントの開催を予定しています。会場は全てROOM記念館内。詳しくはwebサイト、広報誌「ippo」をご覧ください。

【お問い合わせ先】

京田辺校地総務課(ROOM記念館事務局) TEL:0774-65-7800

E-mail:jt-rohm@mail.doshisha.ac.jp



障がい学生支援制度 サポートスタッフ大募集!

同じキャンパスで学ぶ障がい学生(Challenged)の立場に立って、責任を持って支援活動に取り組んでくださる方を募集しています。初めてでもできることはたくさんありますので、ぜひスタッフに登録して、パソコン通訳・ノートテイク・映像字幕付け・代筆・車椅子介助などの活動にご協力ください。謝礼をお支払いいたします(880円/時間)。その他行事・イベントも充実しています。詳しくは障がい学生支援室HP (<http://challenged.doshisha.ac.jp/>)で随時お知らせしています。

【お申し込み・お問い合わせ先】

障がい学生支援室(今出川) TEL:075-251-3273

E-mail:ji-care@mail.doshisha.ac.jp

障がい学生支援室(京田辺) TEL:0774-65-7411

E-mail:jt-care@mail.doshisha.ac.jp

今出川校地・京田辺校地 キャンパスツアーガイド募集

キャンパスツアーは、研修を受けた同志社大学の在学が、受験生や一般の方とともにキャンパスを巡りながらガイドし、同志社大学の魅力を伝える仕事です。普段あまり入ることがない重要文化財や研究施設の紹介、また、建学の精神を伝えることを通じて「母校同志社」の新発見にもつながります。キャンパスツアーガイドは、授業の合間を利用したアルバイト(時給880円)としても魅力です。主に履修する校地が今出川・京田辺のいずれかは問いません。積極的にご応募参加ください。

※ガイドする校地と主に履修する校地が異なる場合は、交通費が支給されます。

【お問い合わせ先】

今出川校地 (株)同志社エンタープライズ継志館事務所 TEL:075-251-3043

京田辺校地 京田辺校地総務課 TEL:0774-65-7010

2013年度「同志社大学キャンパスフェスタ」& 「同志社フェア in 会津若松」

今年も、下記の日程で「同志社大学キャンパスフェスタ」を開催し、校友の皆さま、在学生のご父母、受験生などとの交流を行います。内容は、村田学長による大学紹介、講演会、キャリア支援や入試に関する説明など盛りだくさんです。皆さまの参加をお待ちしています。

開催地	開催日	会場
岐阜	7月15日(月・祝)	ホテルグランヴェール岐阜 JR岐阜駅 バス9分 バス柳ヶ瀬西口 徒歩2分
福島	7月20日(土)	ホテルハマツ JR郡山駅 徒歩15分
	※「同志社フェア in 会津若松」も開催! 7月21日(日)会場:会津若松フシントンホテル JR会津若松駅 徒歩3分	
東京 (秋葉原)	10月5日(土)	秋葉原UDX JR秋葉原駅 徒歩2分 ※東京新島講座と共催
大分	10月12日(土)	トキハ会館 JR大分駅 徒歩4分
高知	11月4日(月・祝)	高知プリンスホテル JR高知駅 車5分 土佐電鉄宝永町電停
秋田	11月17日(日)	パーティーギャラリー イヤタカ JR秋田駅 徒歩8分
山口	11月24日(日)	ホテルニュータナカ JR湯田温泉駅 徒歩8分

参加無料、事前申込制(高校生は申込不要)

■主なプログラム(基本パターンは下記のとおりです)

【受付開始】12:30～【開会】13:30

- 大学の近況報告(大学長)
- 講演会 14:00～
- 個別学部による説明・相談&入試・学生生活相談コーナー、資料展示コーナー
- 入試説明会・ミニ講義
- キャリア支援・地元企業などからの説明
- 交流交歓会 16:30～18:00 *会費制3,000円

詳細はHP (http://www.doshisha.ac.jp/alumni/info/c_festa.html)

【お問い合わせ先】校友・父母課 TEL:075-251-3009

新入学生対象 フレッシュヤーズキャンプ2013参加者募集!

同級生、上級生&教職員スタッフとふれあう1泊2日。

【日程】4月20日(土)～21日(日) 【定員】80人(学部新入学生対象)

【場所】同志社びわこリトリートセンター

【申込期間】4月3日(水)～13日(土) ※先着順

3月に郵送されている申込書に記入の上、両校地いずれかの学生支援課へ。定員になり次第、受付を終了します。

【お申し込み・お問い合わせ先】京田辺校地学生支援課 TEL:0774-65-7021
今出川校地学生支援課 TEL:075-251-3270

新入学生歓迎特別講演会

各界で活躍中の方をお招きし、学生生活を送るにあたっての温かいメッセージを頂戴します。

●八木早希氏(フリーアナウンサー)

【日時】4月17日(水) ※時間は後日HP等でお知らせします

【場所】今出川校地 寒梅館ハーディーホール

【テーマ】「～現役社会人からのメッセージ～ 学生のうちにしておくべきこと」

新入生歓迎 「同大生のしゃべり場」

5月は、入学して約1カ月が経ち「大学ってこんなものかな」と中だるみしてしまいがちな時期です。しかし、大学にはまだまだ皆さんの知らないことがたくさんあります。そこで、他学部の学生・留学生、先輩たちと一緒に豚汁や炊き込みご飯を作りながら話をする中で、これからの大学生活の目標になるような何かを探しませんか。2年次生以上の学生も参加します。当日は汚れてもよい服装でご参加ください。

【日時】5月18日(土) 12:30～

【募集期間】4月15日(月)～当日まで(飛び入り参加可)

【集合場所】京田辺校地多目的ホール 【参加費】無料

【お問い合わせ先】京田辺校地学生支援課 TEL:0774-65-7021



FLAT bふらっとプログラム

京田辺校地ハローホール(多目的ホール)では、コンサートや映画上映などの文化プログラムを行います。

【会場】京田辺校地ハローホール 【料金】入場無料

- 4月24日(水) 映画上映「Les Misérables ～レ・ミゼラブル～」
13:00～/16:00～
- 5月8日(水) コンサート 北欧カンテレユニット～フィンランドの森から～
「Lokki」17:15～
- 5月22日(水) コンサート～アコースティックギタリスト～
「井草聖二×OneVoicesアカペラ」17:15～
- 6月5日(水) コンサート アンコール企画～スウェーデン白夜の音楽祭～
「ヨーラン モンソン+かとうかなこ+松本太郎」17:15～
- 6月20日(木) 映画上映「るろうに剣心」12:20～/14:55～/17:30～
- 7月3日(水) コンサート～スペイン横断800Kmフラメンコギター～
「中島桃子×shimshamタップダンス」17:15～

【お問い合わせ先】京田辺校地学生支援課 TEL:0774-65-7413



WOT(ワット) = "What's on Thursdays!"

「木曜日には何かがある!」を合言葉に、開講期間中の毎週木曜日、映画上映を中心に多彩なイベントを開催します。

【会場】寒梅館ハーディーホール 【料金】本学学生・教職員はすべて無料

- 4月18日(木) 《ジョアン・ペドロ・ロドリゲス レトロスペクティブ in 関西》
今、世界が目にするポルトガルの新星、ロドリゲス監督作品を東京に続き、関西でも上映!
15:30 「男として死ぬ」(2009年/133分)
18:00 トーク 大寺眞輔氏(映画批評家/DotDash主宰)
19:00 短編2作+「追憶のマカオ」(2012年/82分)
*一般有料
 - 4月19日(金) 《篠崎誠監督「あれから」関西公開記念 特別上映会&トーク》
篠崎監督によるトークと、監督の他作品を上映
※詳細は決定次第、HP等でお知らせします。
 - 4月25日(木) 映画上映「最強のふたり」10:30/13:30/16:00/18:30
2011年/フランス/113分/監督: エリック・トレダノ、オリヴィエ・ナカシュ/出演: オマール・シー、フランソワ・クリュゼ ほか
*一般有料
- 【お問い合わせ先】今出川校地学生支援課 TEL:075-251-3270
※内容は都合により変更となる場合があります。5月以降も毎週木曜日、「爆音上映会」などの催しを予定しています。詳細はお問い合わせください。



CLOVER THEATER クローバーシアター

開講期間中の毎週火曜日、寒梅館のミニシアター・クローバーホールでは、映画史に残る名作を中心に様々なイベントを開催します(デジタル上映)。

【会場】寒梅館クローバーホール(地階) 【料金】入場無料

- 4月16日(火) 《ジョアン・ペドロ・ロドリゲス レトロスペクティブ in 関西 プレ企画》
ジャン・ジュネやファスビンダーの系譜を受け継ぐと言われるロドリゲス監督特集を記念して、ファスビンダー監督作品を上映。
16:30 「13回の新月のある年に」(1978年/ドイツ/119分)
18:45 「ケレル」(1982年/ドイツ/104分)
- 4月23日(火) 《写真家・田村尚子「ソローニユの森」出版記念 特別上映会》
写真集と同時に撮影した作品上映と、特別ゲストによる対談。

【お問い合わせ先】今出川校地学生支援課 TEL:075-251-3270

※内容は都合により変更となる場合があります。5月以降も毎週火曜日、映画上映などを予定しています。詳細はお問い合わせください。

創部102年の名門ラグビー部で 初のラグビーウーマン フランス・ワールドカップの日本代表へ

〜目指すのは2014年、
フランス・ワールドカップの日本代表へ

私がラグビーを始めたのは、「寝屋川レディース」という女子のクラブチームの体験練習に参加した中学2年生の時です。ちょうど同じ頃、ラグビー経験者である父や弟とトップリーグの試合を初観戦。目の前で繰り広げられる外国人選手の迫力あるプレーに圧倒され、ラグビーの魅力にすっかり惹きつけられました。

クラブチームで練習を積み重ね、進学した同志社香里高校ではラグビー部への入部を強く希望しました。しかし、女子部員は私が初めてで、最初は練習生という形で受け入れてもらうのがやっと。しかし、諦めずに練習に打ち込んだ結果、1年生の冬に正式な部員として認めてもらうことができました。あの時のうれしさと興奮は、今でもよく覚えています。

高校を卒業する頃には、当たり前のように「大学でも周りの男子部員と一緒にラグビーを続けたい」と考えていました。一方で、大学のラグビー部は100年以上の歴史があり、偉大な先輩をたくさん輩出しているため、女子選手の入部が認めてもらえるのか、不安もありました。しかし、先輩方が温かく迎えてくれ、同志社の自由な校風を身をもって感じました。ラグビーは仲間意識が強く、辛い練習も共に支え合って乗り越え、感動をみんなに分かち合う、とても熱いスポーツです。高校の部活を通して一生の仲間ができ、さらに大学のラグビー部で仲間が増えることがとてもうれ

しいです。これまで一番充実した時間を過ごしたのが高校の3年間でしたが、これから大学で過ごす時間は、それ以上のものになるだろうと期待しています。

今の目標は、2014年にフランスで行われるワールドカップに出場すること。2016年のリオデジャネイロオリンピックでは、7人制ラグビーが初めて正式種目に採用されますが、フィジカルが強い人、足の速い人が有利とされています。しかし、152センチと体の小さい私には、体型的にも向いているとはいえません。だから目指すのは、日本でも主流である15人制ラグビーのワールドカップ。そのための第一歩は、関西代表のメンバーに選ばれることです。昨年はリザーブだったので、まずスタメンを勝ち取らなければ練習にも熱が入ります。

現在のポジションはスクラムハーフ。パスを出すのが仕事ですから、安定したパスをいつでも出せるようにすることが課題です。タックルが決まった時やいいタイミングでパスを受けて抜けることができた時、ラック(密集戦)からボールを持ち出して空いたスペースを走り抜けた時は、とても爽快な気分になります。基本的なスキルに差はありますが、サインプレー、コンパクトプレーの中での攻防など、ラグビーの面白さは男子も女子も変わりません。大学卒業後は教員になり、そんなラグビーの楽しさ、面白さを伝えて、女子のラグビーをもっと盛り上げていきたいと思っています。



堀内 春香さん
「スポーツ健康科学部1年次生」

